



二
統史國字解
二

二

79
3868
2



門 79
號 3868
卷 2

瓶史國字解卷之二



徠雲齋 桐谷鳥習 註解

三器具

瓶花瓶亦須精良譬
如玉環飛燕不可置
之茅茨又如嵇阮賀
李不可請之酒食店
中

三器具

瓶花瓶亦須精良譬
如玉環飛燕不可置
之茅茨又如嵇阮賀
李不可請之酒食店
中

器具とハ花を挿る瓶器の美意を揚ぐ住物を揚ぐ録するをいふなり。○
善花瓶亦須精良とハ善花とハ花を挿ることもまた水とて花を養ふなり瓶
ハ瓶器とてその花を挿る養ふ瓶器なり。また須とハまづといふことなり此字
二度判り後子かへりてべくと讀むはあるべくと讀みたり精良なるべくとハ
精ハ寸くると譯良ハ寸くと判字にて其花を養挿る瓶器ハ亦須くまづ

早稲田 大學 圖書印
和 25.9.5
購 券

精良ものを擲てもちゆべしと云ふことあり。譬も玉環飛燕不可置之茅茨とハ玉環といふハ唐の楊貴妃の小字ありて即楊貴妃のことをさしつゝあり。飛燕といふハ前子も云ぬ漢の成帝の皇后まで三子入の中のみ人あり茅茨とハ萱萱の棧しき家のことあり。又也愁阮賀李不可精之酒合店中とハ愁ハ晋の竹林七賢の一人きて愁康と云へ人あり阮也其七賢の一人きて阮藉と云へ者あり賀ハ唐の賀知章といふ人あり李ハ唐の李白といふ人のことあり酒合店中ハ酒音あり愛る店ありなり此邦の煎賣酒屋料理茶屋等とのことあり請すとハ接對すること人を呼ぶとて馳名をすることあり。是云意ハ花を挿装小瓶器亦須精良なるべし随分勝れて好き瓶器を携て挿べしとあり凡俗ある器は雅正の上花ハ挿べりしはハ玉環飛燕などの様を英入を萱萱等との茅茨の棧しき葛家と云へハ置へりさるぬ。又愁康阮藉知章李白等の如き賢徳ある風流人ハ精對するも清淨潔白の風雅ある望教を設けて請すべきことあり。賣屋料理茶屋等との舟棧のいやき凡俗の店廊ハ請すべしと云へるが如しといふことあり花も亦如斯好上花琳花等ハ舟き小品の器ハ挿べしす此未出る金屋玉堂等もいふべき上品の良器ハ挿べしことあり是眞子花を寵愛するこの本情といふべきあり

嘗見江南人家所藏
舊觥青翠入骨砂班埵
缺可謂花之金屋其次
官哥象定等窰細媚
滋潤皆花神之精舍也

嘗見江南人家所藏舊觥青翠入骨砂班埵起可謂花之金屋其次官哥象定等窰細媚滋潤皆花神之精舍也

嘗見江南人家所藏舊觥とハ嘗とハあつと云ふこと前篇といふことあり江南ハ處の名これハ晉ハ日本まで南海までいふことあり江の南の國といふことあり人家とハ其江の南の國子住人の家といふことあり所藏とハ其家子持傳てて重寶するといふこと舊觥とハ舊ハふるきこと觥ハかどの有花瓶より上右ハ酒と入る器を花瓶と成しつゝなるもの多し是も元酒といれるものと見へり。青翠入骨砂班埵起可謂花之金屋とハ青翠とハ青く翠ありといふこと入骨とハ其青翠の色が骨まで透ぼてみゆるといふこと起り因る骨は入るハ骨あり起り埵起とハ妙ハすなはち埵ハまがらといふこと埵起とハふくれわがらといふこと其青翠の器ハ砂の樣かものが埵はつきやぐれわがらてあるといふことあり金屋とハ屋ハいと刻字までこれハ

結構ある昔清の家といふ義あり。總て花を養入子とて花瓶を
 其家子とてくしものゆへ斯くあり。此花瓶古物して青紫の色去人まで
 透瑤り妙の様あるもの。瓶はつきくふくれにきわまりて甚だ雅な風流の結
 構あるものと見たり。中郎先生むり見られて好き物と思はれざると思ひ
 出して茲に記されしるあり。因之花の金屋と謂ふと書れざるあり。其
 次官守象定等密細媚滋潤。皆花神之精舍也。此室奇象定
 ともは陶器の名あり。五代の五は始る室も燈物の徳名あり。様といふも
 此子トてあり。細媚滋潤ハ細媚ハきめこまう子美しきといふこと。滋潤ハ
 かつこりと潤あり。膏を引るるやうな光澤のあるをいふあり。花神ハ花
 の靈といふこと。名を瓶を指していふあり。精舍ハ元學問所のこ
 とあり。及立寺院經讀の室等のこと。今ハ多て寺院の事。用
 いたれ學問をとする所の家。居子多し。るあり。前子器工好き。花器を
 金屋といふて結構ある家子。とて其次に精舍とてくしるあり。因に官
 守象定の室の細媚滋潤。皆花神の花のよめハ精舍ともいふ
 べきものなり。此花瓶ハ中郎先生の所持せられざると思へり。

大抵齋瓶宜小而矮

大抵齋瓶宜小而矮。銅器如花

銅器如花。觥銅觶尊
 壘方漢壺素温壺匾
 壺密器如紙槌鸞頸
 茄袋花樽花囊著艸
 茹槌皆須形製减小
 者方入清供

觥銅觶尊壘方漢壺素温壺匾
 壺密器如紙槌鸞頸茄袋花樽
 花囊著艸茹槌皆須形製减小
 者方入清供

其花を挿る。空敷のこと。とふあり。瓶ハそいけのこと。縁有るとハ。エドック。低
 こり。小字。子。大抵。書齋。中。花を挿る。瓶器。ハ。小。子。矮。く。り。低。く。と。あ。が。
 宜とあり。○銅器。如。花。觥。銅。觶。尊。壘。方。漢。壺。素。温。壺。匾。壺。密。器。と。ハ。銅。
 器。と。ハ。か。ら。の。瓶。器。と。い。ふ。こと。あり。此。六。品。皆。か。の。花。瓶。の。形。の。名。あり。
 ○密器。如。紙。槌。鸞。頸。茄。袋。花。樽。花。囊。著。艸。茹。槌。と。ハ。密。器。と。ハ。燒。物。の
 花。瓶。の。こと。あり。密。ハ。燒。物。の。意。名。子。此。七。品。皆。燒。物。の。花。器。の。形。あり。
 ○梨。雲。多。先生。此。瓶。史。中。子。出。る。花。瓶。の。形。を。圖。し。て。亦。六。徑。及。諸。傳。記
 子。出。る。所。の。花。瓶。或。ハ。樽。古。圖。等。子。出。る。白。雲。尋。壺。の。形。其。奇。妙。花。器。と
 あり。べきものを取て録して編冊として花器圖苑と名けて家蔵して門人

花心の者、これを授く又和朝の風、子慕て親、親子竹、簫、墨を授て
神花、子便理、ある形を悉く、圖して、亦花、委、無、撥、聯、担、板、釣、瓶、等、の、神
花、子、用、き、器具の圖寸法、等、悉く、あら、か、これを、續、花、器、圖、苑、と、名、け、
梨、雲、笈、の、家、藏、と、名、け、門、生、花、心の者、ハ、授、け、與、る、あり

○皆、須、形、製、減、小、者、方、入、法、供、と、ハ、須、と、ハ、ま、つ、と、ち、ゆ、る、と、ハ、義、之
此、字、二、及、子、ん、で、す、く、後、ま、う、り、べ、い、と、も、あ、り、法、供、子、入、べ、い、あり、形
制、衣、と、ハ、形、の、造、一、と、い、ふ、こ、と、あり、減、小、者、と、ハ、小、形、を、い、ふ、こ、と、あり、是、皆、前
子、之、ゆ、り、花、器、ハ、之、の、低、く、小、形、を、佳、と、す、る、所、あり、方、子、と、ハ、さ、ら、る、と、讀、む
字、あり、ち、ち、る、子、清、供、子、入、べ、い、と、い、ふ、義、あり、清、供、と、ハ、清、ハ、き、子、す、む、と、
訓、字、マ、テ、清、潔、の、義、あり、供、ハ、そ、あ、ふ、さ、く、と、釋、字、マ、テ、去、意、ハ、大、抵、花、瓶
ハ、皆、須、く、形、製、之、ハ、低、く、矮、く、して、小、形、の、を、用、る、方、子、さ、ら、る、子、清、潔、の
供、子、そ、あ、入、る、べ、い、と、あり、せ、い、高、く、大、長、も、の、ハ、悉、く、し、き、と、い、ふ、こ、と、あり

不然與家堂香火何異
雖舊亦俗也然花形自
有大小如牡丹芍藥蓮
花形質既大不在此限

不然與家堂香火何異
雖舊亦俗也然花形自有大小如牡丹
芍藥蓮花形質既大不在此限

不然與家堂香火何異、雖舊亦俗也、ハ、家、堂、ハ、家、の、内、に、神、仏、を、祭、る、こ、れ、と、家
ハ、短、小、く、す、人、ハ、こ、い、ふ、こ、と、あり、家、堂、ハ、家、の、内、に、神、仏、を、祭、る、こ、れ、と、家
堂、と、い、ふ、神、佛、の、持、佛、仏、檀、と、い、ふ、の、數、あり、火、と、ハ、其、神、佛、の、前、に、備
物、色、く、有、る、中、に、も、多、焼、を、身、一、と、す、る、あり、花、瓶、の、之、ハ、低、く、矮、小、く、す、人、ハ
其、多、焼、と、何、を、多、か、ん、何、の、美、る、こ、と、あ、き、こ、い、ふ、こ、と、あり、又、堂、塔、の、前、
淨、土、盤、と、い、ふ、大、なる、多、焼、を、置、て、鉢、蓋、を、捻、ち、も、の、あり、是、等、の、類、も、あ、り
今、此、邦、も、て、も、青、松、の、花、瓶、或、ハ、か、ね、を、も、多、く、佛、前、め、き、さ、る、も、の、あり
こ、れ、を、嫌、あり、因、る、花、瓶、ハ、短、小、く、せ、い、の、低、き、も、の、を、佳、と、す、大、長、お、し、て
せ、い、の、高、き、も、の、ハ、雖、舊、亦、俗、也、舊、と、ハ、古、物、の、一、と、舊、物、あり、と、も、亦、俗、也
り、と、い、ふ、字、あり、是、前、に、云、花、瓶、ハ、低、く、矮、小、と、は、と、す、こ、い、ふ、こ、と、も、然、花、形、自
大、小、有、り、牡丹、芍、藥、蓮、花、の、め、き、も、の、花、の、形、質、の、生、れ、つ、き、矮、小、大、き、け、れ、
此、限、に、在、り、短、小、き、器、を、さ、ら、り、も、ハ、限、を、う、け、其、花、子、因、て、廣、大、さ、る、も、用、へ、き、こ、と、あり

嘗聞古銅器入土年、嘗聞古銅器入土年、久、受、土、氣、深

父受土氣深用以養
花花色鮮明如枝頭
開速而謝遲就瓶結
實陶器亦然

用以養花花色鮮明如枝頭開
速而謝遲就瓶結實陶器亦然

花を鮮明とハ其國ハ前蓋
銅の花瓶と云ふことあり
入去年久受去年深とハ古き
一つの頃より也知れず
中子年久く埋へたるを掘
こし深とあり。南ハ表
花の色鮮明とハ用い
其花瓶と云ふことあり
花を養殖せしめんと
光澤といふこと鮮明と
其色艶のあやうき麗
其すのこのちかり。必
枝既再速而謝遲就瓶
結實とハ枝既ハ
あごのこすといふこと
地子生る時の條迄のこ
とあり謝するといふこ
事とハゆるさるといふ
ことあり花の色不之
落るといふことあり
瓶のちちちて養を結ぶ
こととくといふことあり
○此去意ハ古國前蓋
きおく古き唐國の瓶
器也中子年久く在り
年久く在り花の色鮮
明といふことあり

明と氣一く光輝を發し枝
既地子生る時の如く
梢の蒼までも開くこと
速よして謝志不之落
るといふことあり瓶
既きて實を結ぐ如き
と箇撮と云氣を
深く含るハ陶器も亦
たあり。陶器亦然と
ハ陶器ハすものこと
字より燒物のことあり
磁密の花瓶と云中子
久く埋り在りハ亦然
とあり。爰は手前篇試
之様といふことあり
上野國信濃國志火而
塚といふものあり是ハ
流石に往古神代の頃
火の兩降ける程は人
民穴を堀て去中を家
とせり位とあり其塚
の如くありて今も殘
りて在り田の時畑
の邊をとり折々堀
崩すことあり其中
より色々の器物出る
されども亦て造りし
もの又金物影ハ皆腐
りて形もなき唯陶物
より残りありされ
れども亦く碎けて用
立難し。こまざる
磁器のものあり手
上州子知人ありて
無磁の物をひら貫
ひ滑り形陶利の如く
なりてひらく口廣
きものありきや
き燒かりといふ
國ハ花瓶とせり然
るも亦も草子ても
去れそく既も粘ん
とするもの在此器
ハ挿置るも亦も忽
蘇りて性勢を去其
勢地ハ亦生し。こ
るこく枝條の蒼
までも長ち用て實
を結ぐことあり
減奇器といふべし
以敷秘藏して空
右ハ瓶と云ふ今
此瓶史より所の
器也中子年久く
去氣を受るこ
深きもの花を
養殖せしめんと
妙ありといふ
ことを視て我
ハ上州より
得たる器の花
をより養と思
ひ合敷明く感
せしあり

俗中花のうつり悪く驚くこと俗に昇く尚又金泥をちりめ
花盛るもの其俗中殊に花のうつり悪く花神の悪むべき者あり
金銀を陋して銅鐵を崇ハ雅正あり密核の別ハ別ハ雅正深く花
るはりも水揚もよく花の保も好きものあり挿花を好むの専風雅の
意を失はず最花の性命を延る養方專要なるべきあり

冬花宜用錫管北地
天寒凍氷能裂銅不
獨磁也水中投硫黃
數錢亦得

冬花宜用錫管北地
天寒凍氷能裂銅不
獨磁也水中投硫黃
數錢亦得

冬花宜用錫管とハ冬花ハ冬の花なり錫管ハ錫の管なり錫は
拙る入筒ありこれハ冬の日花を挿ておく時水は氷がそりて寒氣強
けれハ花瓶氷のさめ凍裂るなり故に子き花瓶ハ錫を以て管を挿
入て用べしとあり錫ハ元來うね性相柔なるゆへ是より更筒を入
時ハ何種凍張つても凍裂ることをおしめ斯する時ハ花瓶は
北地天寒凍氷能裂銅不獨磁也とハ北地ハ即北京のごとあり

中郎先生居られざる所あり即北國ハ寒氣酷く故に天寒と云い
り凍氷ハ凍ハ凍ハ凍と譯氷ハ氷と云い訓能裂銅ハ銅ハ銅ハ銅の花
瓶のごと北地天氣寒嚴しく水が凍氷瓶の花瓶も凍裂氷裂とあり
不獨磁と磁ハ磁物なり磁而密の器なりハ少氷ても破易きものかれも
寒氣烈敷凍氷強極密物なりてなく左細までも能裂破方とあり
獨ハ密と云いなりてなくと云い故に錫の内管を用ひしとあり水中投
硫黃數錢亦得と云いハ水の中子硫黃を入れハ水ぬものなりといふことあり
凍氷敷く花瓶の水も凍破裂るゆへ其水中に硫黃敷散を投する
ことを亦得と云いなり故に一錢といふハ一錢のこと敷散ハ何れも其
水中に分量子名とて固さをえんに入れしと云いなり投するハちがれると
いふことあり水の張ぬ様ハ水中に硫黃を入ることも亦得と云いなり
○これハ北京より限らず日本子ても山越き國子ても冬花を挿て夜中
子玉れハ水一圓の氷とあり務墨時ハ花瓶を破ることもあり武州多摩
郡西山附近より相州大山連岡州津久井縣あり子玉れハ老細の花瓶
といふこと凍裂ることも予及て見ざる所ありまて竹製密核の者等ハ程
なり是を以て觀る時ハ飛後國信濃國等の寒國子てもさきり凍氷裂る
ことあるべしと思へり錫管を用ひ或ハ水中に硫黃を投て湛ることもあり

四擇水

京師西山碧雲寺水
裂帛湖水龍王堂水
皆可用一入高粱橋
便為濁品凡瓶水須
經風日者

四擇水

京師西山碧雲寺水
裂帛湖水
龍王堂水
皆可用一入高粱橋
便為濁品凡瓶水須
經風日者

を擇むといふことあり京師西山碧雲寺水裂帛湖水龍王堂水皆可用一入高粱橋便為濁品凡瓶水須經風日者
可謂之京師之北水也西山之北水也其水之清者有之其濁者有之其水之清者有之其濁者有之
高深橋といふ橋の名あり此橋諸方より川と合の所懸ておる橋こころり其橋下はひとび流る時ハ便為濁品酒ハ二ると訓字其水とハ凡瓶水とハ花瓶一入水といふことあり凡瓶水須經風日者
流水をいふなり譬ハ日本までも武蔵國多摩川をいふハ彼風日を経者
子て極品の名水なり井戸の水ハ何程能き源接井までも意水ゆ花を
養ふハよろしうらす免角子流水風日を経者を用へきあり

其他如桑園水滿井
水沙窩水王媽媽井
水味雖甘艱花多不
茂苦水尤忌以味特鹹

其他如桑園水滿井
水沙窩水
王媽媽井
水味雖甘
艱花多不
茂苦水尤忌以味特鹹

其他如桑園水滿井水沙窩水王媽媽井水味雖甘艱花多不茂苦水尤忌以味特鹹
其水尤忌以味特鹹
園といふ園の名あり其園中子在所の水あり滿井王媽媽井ハふも子
井戸の名沙窩ハ地名なり此四所の水の味甘と雖花を養ふ多ハ
不茂茂せずとハ繁茂すといふことあり此四所の水の味甘と雖花を養ふ多ハ
井水及水勢す風日を経者子非ざる水尤忌花を養ふ多ハ茂す
子ハ一くすことあり尤忌若水若水ハ多き水其苦き水ハ鹹氣を特もの之
致味特鹹を以てありといふあり鹹ハ若くはゆきといふ字なり用へるす

未若多貯梅水為佳
貯水之法初入甕時
以燒熱煤土一塊投
之經年不壞不獨艱
花亦可烹茶

未若多貯梅水為佳貯水之法
初入甕時以燒熱煤土一塊投之
經年不壞不獨艱花亦可烹茶

未若多貯梅水為佳
貯水之法初入甕時
以燒熱煤土一塊投
之經年不壞不獨艱
花亦可烹茶
つりりそ細霏き雨連日降を以て其雨水を梅水と云ふなり雨ハいつまで降
るれども此梅水の芽ハ木の芽やぐれて若葉と成り總而草木長育の時
かれハ草木を育てるもの雨あり故に此雨水ハ花を養の身一因而け水
を多く貯ると為佳不若とあり佳ハよくとすなりよこそあり不若とハ
前子出川水ありと云ふ梅水中の雨水子勝る者ハかきと
攻子梅水を多く貯て花を養へるといふことあり○貯水之法初
入甕時以燒熱煤土一塊投之經年不壞此其梅水を貯る子
其供養ハ水腐て性を失ふなり因る水を貯る法を著て後云むる
初入甕時ハ甕ハかめのことあり初甕子入る時燒熱せる煤土ハ燒ハ
やけるといふ字熱ハあつといふ字煤土ハ甕のやけ云あり一塊といふハひと

未若多貯梅水為佳
貯水之法初入甕時
以燒熱煤土一塊投
之經年不壞不獨艱
花亦可烹茶
くまりと云事取之ハ其甕の中一投入て盡ことあり經年とハ
年を越し久く何年垂てもと云ふこと不壞とハこぼれぬといふ事あり
是ハ其梅水を貯る子初甕子入る時煤土の甕の土の能燒て盡し
去存子ありとると一塊投入ておけハ何年垂ても越て不壞すくさぬと
いふことありこれ水を貯るの法ありの不獨其花亦可烹茶とハ
け水を貯て盡けハ梅り花を養ふなりあらず亦茶を烹て甚佳といふ
あり勿論甕中の燒去ハ煤土といふ藥種も用るものあり
此章を擇水といふこと前子も云ぬ釋ハ云らむといふ字子て水を擇む
ことあり中多してハ梅花子限す後而一切水を悉く吟味することあり
何の國も清麗の水ハ多なきものあり然るも水ハ合食物一切何子因て
も晝夜を多しことよく用を為すもの故能く擇すハ有づらざる茶
子合ぬ水多きものなり是ハ水の性宜くぬ故あり別の梅花ハ根を離
水より其養を更て勢力盡光を散すものされ能く吟味すべきあり

五宜稱
插花不可太繁亦不可太瘦多
五宜稱
插花不可太繁亦不可太瘦多

凡而挿花ハ糸子にて縛るなり或ハ針かぬおとを用て妻作子態をつけ
まてハ針のぬく竹釘を挿て刺まてハ花配の留木の腰へ差理し圓くさ
入てさうこの窮屈するハ懸きことあり挿花の習未熟なりて枝の下
あるがゆへあり其の挿花といハ瓶挿一とてちよと挿入て其後出生の
通子能すなりて動すすてゆるとしてあつても水際の際も丸く一本の枝
子縛りて花容の風流あるを佳とすこれ上子の枝あり根のこまりごと
花のすわりとてあつたれハ出衆ぬことあり尚書ハ挿花園會子著とり

夫花之所謂齊整者
正以參差不倫意態
天然如子瞻之文隨
意斲續青蓮之詩不
拘對偶此真齊整也

夫花之所謂齊整者正以參差不倫意態天然如子瞻之文隨
意斲續青蓮之詩不拘對偶此真齊整也

是花之所謂齊整者正以參差不倫意態天然如子瞻之文隨
意斲續青蓮之詩不拘對偶此真齊整也

論意態天然 此參差ハ參ハまじりたる差ハあつてとて字ありこれハ
待徑の字にて長き短き相雜りて等しくさるをいふなり不倫ハ備ハ
ひとしと注して不備ハひとしとらすこと出衆これハ長き短き品と相雜
ひとしとらすこといふこと譬ハ字本の枝葉を色々の名をつけてこれハ斯
るぬもの此花ハ斯ハ葉がかければぬるぬる窮屈は程屈をつけて
挿花あり或ハ此節おの節と削りたることいふものなり其の挿花ハ波
左枝のことまでハ一是ハ本の枝態字の出生の葉なりは傲て地上生
出する産の儘まで挿る其態能齊整極する事ありこれを長き
短き品と相交て等しくさす同くす其節を削ぬといふものなりさ
れハ字本同物を或極挿ても同態ハ出来ぬものなり是眞の挿花の
風意なり意態ハ意ハこちもちあり態ハ枝の姿の麗しきことあり意
態と熟字にて意態姿態の麗しきことあり以天然ハ天然自
然なるをいふなりといふことあり此去意ハ前よぬく花を挿るハ太繁
多うす太ゆく疲うすす高き所低き所ありて疎まばある所密て
こむ所ありて盡人の面を畫地取の布蓋のごとくおするありされども
又是球にも多程其通はせぬハぬといハ窮屈なることハあつす
又花之所謂齊整といハ能くこの挿といハ者ハ參差とて不備とて

長き程き品々相支て同くす等々すべく意は思枝の姿態の麗き
 こども皆自然自然其本態も其子の出生の質も倣て自然の
 態も神るとして倣とするあり是を齊整て能揃とハふありは殿持花
 の深意より深き效のありとあり尚多ハ持花圖會は思合べし
 如子瞻之文随意紛擾青蓮之持不拘對偶此真齊整也
 とハ子瞻ハ蘇軾ごとく東坡先生のこゝかり東坡先生天性文章は
 名譽なく我が意は出る俣は作るは文の紛擾自そふりて妙所はあり
 けるとあり是文法がそろずしく能齊整かり是を真の文章ありて
 却て文法は持りといふこゝかり青蓮ハ李白が詩あり字太白詩を
 青蓮居士といひかり其李白が賦る詩ハ對偶は拘す詩の對句は
 敢て貪着せざりかり然るも天然其體齊整ことのひとありて
 妙境は至りかりこれ真の詩より却て詩趣は猶つりとあり
 此去意ハ支挿花の香意といふ所ハ正は參差とて不倫意態天然
 自然あると案し無理あることをせず我意の俣はせず其才子の
 出生の質もふか後て自然の俣は持成時ハ同花同字何能推並ハ
 同ハ態ハ出衆ぬものあり能令ハ子瞻ハ文の意は但て作り紛擾一
 が詩の對偶は拘すして詩法のよう齊整め一是真の齊整ありとあり

若夫枝葉相當紅白
 相配此省曹墀下樹
 墓門華表也惡得為
 齊整哉

若夫枝葉相當紅白相配此省
 曹墀下樹墓門華表也惡得為
 齊整哉

善文枝葉相當紅白相配此省曹墀下樹墓門華表也惡得為齊整
 哉とハ枝葉は二枝ハ多かり葉ハ多かり相配とハ両方より相互は向ふこと
 こゝあり紅白相配とハ紅ハ赤一白ハ多し一相配とハ赤き花と白き花と
 相互は匹配向合とハ事あり此省曹墀下樹墓門華表也とハ省曹ハ
 正堂の役所あり墀ハ下樹ハ其役所の邊のき
 階のせとくハ事也樹ハ植木の事なり其役所の邊の階階の左右ハ右邊の福
 造り木を種ておく肌り如ハ此邦の震殿の檀階の左右ハ右邊の福
 左邊の櫻あるがごとく墓門華表ハ墓門ハ墓所の門あり華表とハ
 色は彩色彫物ある柱のこゝかり都而中華ハ神社佛國の入口等
 子ハ此柱建てあるかり此方の鳥居ハ蓬とも是同一類のものあり爰ハ彼の
 墓所のあるは建てあるかりこれを華表といふあり。惡得為齊整哉

と八前子云ぬく齊整て天然自出の能揃と多押りよまられて善定枝
兼相互に向あり両方一同一様子立並ひ又紅白相互子正記向合等と
省曹の役所の障子の造り樹のこころ或ハ墓門の華表の臺老る一の
ぬまありてハ甚見悪一悪を齊整とこのひらあふことを薄裁凌白
齊整とる美の押花の致趣を為こそあり師傳子押花去蝶の
事おれと押花圖會子委しく著しくハ穢りて後子畧一ぬ

六屏俗

室中天然几一藤床
一几宜潤厚宜細滑
凡本地邊欄漆卓描
金螺鈿床及彩花瓶
架之類皆置不用

六屏俗

室中天然几一藤床一几宜潤
厚宜細滑凡本地邊欄漆卓描
金螺鈿床及彩花瓶架之類皆
置不用

屏俗ハハヤキことあり鼻く拙きことを退けよといふことあり押花を好の輩
其席子用る道具皆風流子して雅ものを備へておく過美あるものハ俗あり

皆屏垂つうすといふ事あり。室中天然几一藤床一几宜潤厚宜
細滑ハ室中ハ室ハといふ字まで家の中といふことあり天然几一ハ几
つこのことあり是ハ天然自出の本地の几と云ふことあり藤床一ハ藤ハふ
かり床ハせうきかり腰掛かり藤蔓まで造る腰掛かり一ハ文章の
趣ありいづれも限るべしすされども飾り澤山も雅あるべし

是ハ前子も序文の中にもいふごとく中華ハ家の因子床と云ふ事疊と敷
す皆去間敷瓦まで入ハ立て居る禮あり打らるべき滑る時ハ床几ハ腰を掛て
居るなり事等の時も腰を掛て居ることあり因西一人子一充床几と疊
つこかり及子押花もつこの上子疊ことあり几ハ潤厚ある子宜一ハ潤ハ
ひらくわひありと云事厚ハあつく志やふありと去夏花を疊几ハ廣く大イ
厚く文安あるが宜とあり又細滑ある子宜とハ細ハこまるといふこと本の本目
のこまらあること滑ハあめらうとすべしと云事本目細滑とい
奇麗子きやや子見ゆるを宜とあり何れ花を疊几ハ尤く過麗あるかのハ
嫌ことあり如何にも質朴と云こみりて雅子見ゆると傳へするありけ趣は因
て今此邦子も梨雲齋初て唐几の形子慕りて花臺と云ものを採用する
是本朝花臺の権輿あり。凡本地邊欄漆卓描金螺鈿床及彩
花瓶架之類皆置不用ハ本地とハ其押花を疊所と指し本地と云あり

通欄とハ達ハかどりの字なりと云ふは欄ハ欄干なり縁ハ欄干を云ふ
る凡かり漆車とハ漆ハる一で漆とるを云車ハさうなりやちりつとの
とちり獨金ハ獨ハと云ふ字より金薄きて蔣給と云ふこと際細ハ
螺貝のこ細ハ字書子以窓飾器謂之細と注して珠玉と心器物を
鏤飾と云ふことあり後より螺貝青貝等にて飾る車や床几の事と
いふあり彩花とハ唐字等の花形柄を蔣給と云ふものを云瓶架と
ハ挿花の飾器を臺架なり新様ハ花菱麗のものやうあるものハ飾物
して風雅ハ好ぬものなり因る斯の彩皆接垂て用ずと云ふことあり是
指す此邦にても當時挿花の執器等子甚凡俗あるもの事あり是の
挿花を好者使すも用づら高妻ハ挿花圖會ニ著せり

七花崇

花下不宜焚香猶茶
中不宜置果也夫茶
有真味非甘苦也花
有真香非烟燎也

七花崇

花下不宜焚香猶茶中不宜置
果也夫茶有真味非甘苦也花
有真香非烟燎也

花崇とハ花子花あるものを花の爲ニ崇といふて越て嫌ことなり崇ハとり
こハ字あり○花下不宜焚香猶茶中不宜置果也○花の下にて多
を焚へくす宜くさるあり凡そ多氣ハ大花の白いを奪うゆかり譽ハ
於茶席中果を盡へくさるありと云ふなり果ハ木の葉なりさものあり
茶菓子ハ密相梨此西此等の白ひのものハ出すことせざるごとく茶の味
と奪ひて茶菓子はハ應くさるなり是則花下にて多を奪うハ果を茶の
に取出すと同ことありといふことあり○又茶有真味非甘苦也○ハ
美ハまこと味ハおほひかり甘ハおまろ若ハおろきなり茶ハ美の格別の
味あり甘も苦もあらずとあり○花有真香非烟燎也○ハ真ハま
こと多ハ白ひ烟ハけり燎ハてらすことと云ふなり刻字云々焚香との白ひ
のこさるこれ花ハ天然其葉質の白ひ有て焚物等のこさる白ひ
非すと云ふなり故は花下にて多を奪うて忌烟燎とけり集すのことハ
花の多を奪ふことあり拈香の熱有り因るこれを花崇といふなり

味奪香損俗子之過
且香氣燥烈一被其
毒旋即枯萎故香為

味奪香損俗子之過且香氣燥
烈一被其毒旋即枯萎故香為

花之劍又捧香合香
尤不可用以中有麝
臍故也

花之劍又捧香合香尤不可用
以中有麝臍故也

味奪其換俗子之過也八味奪と八条の香の風味を果木の蜜等子
奪るといふことあり 多換とハ多ハ花の香の白ひあり花の下の葉
燦ハ其香より花の香を換ずるといふことあり これハ是依子の過あり
どいふことあり 依子ハ凡俗の魚人のことあり 愚ある人の癖
却る天然の風流雅趣と失ものあり ○且多氣燦烈一被其香換
中 括葉とハ且とハまこといふ義 其上とハまことあり 多氣ハ
こころあり 燦烈とハ燦ハうごすこといふ字 烈ハさけきこといふ字 あり 一被
其香とハ少すも其燦烈の烟香を花に被さばいふこと 被ハ
ハといふことあり 旋印とハ旋とハやとよ義 印ハ即時をいふことあり
此去意ハ味奪多換ハ依子の魚人の仕過す所よりあり 且又其上
子 焚もの多ハ燦烈とハうごすこといふ字 焚ハ花の香に大毒ありと
いふことあり 善一其香をいふことあり 焚ハ花の香に大毒ありと
○ 故多為花之劍又とハ劍ハつるぎ又ハやいむをかり 故多ハ花の香に大毒ありと
ハ

如くありといふことあり 持多合香を不可用以中有麝臍故也とハ持多とハ
線多あり合多ハあせ多あり 煉多あり 此影を用へるとあり 麝臍ハ
麝香の香あり 麝とハ獸の臍あり 此多ハ烟も花の香を多あり 持多
合多の中ハ麝香をかゝる故 殊更ハあせ多あり

昔韓熙載謂木犀宜
龍腦餘醢宜沈水蘭
宜四絶合笑宜麝薝
蒲宜檀此無異笋中
夾肉官庖排當所為
非雅士事也

昔韓熙載謂木犀宜龍腦餘醢
宜沈水蘭宜四絶合笑宜麝薝
蒲宜檀此無異笋中夾肉官庖
排當所為非雅士事也

昔韓熙載謂とハ韓熙載ハ五代の時の人あり 故子中郎の時より 鑿ハ
昔より謂とハ其韓熙載がいふことあり 木犀ハ宜 龍腦とハ木
犀の花ハ龍腦の白ひを合るが宜とあり 餘醢ハ宜 沈水とハ餘醢の花
ハ沈水の香を合るが宜とあり 蘭ハ宜に絶とハ葉の花ハ四絶香を
合て宜とあり 合笑ハ宜 麝とハ合笑の花ハ麝の香の白ひと合て宜と
あり 薝蒲ハ宜 檀とハ薝蒲の花ハ檀の白ひを合せるが宜とあり 是

皆擇此載增垂一こかり是係白紙の事よわ次譬ていふ。○此等異
筆中夾肉室庖排當所為とハ筆ハけのこかり筆中ハ筆の中と云
夏交肉とハ筆の中ハ筆や承の肉をいれて煮るの料理とするこかり
官庖ハ庖ハけりやと刻々産所のこ室庖とハ公儀の産所といふこかり
排當ハ料理の品をとり合ふこかり云意ハ排當載が謂一花子多
と合せるものハ惣書ハ室庖の公儀の産所より筆の中筆子肉を入れ煮
この料理の品を排當に異こかりとかり異ハうをこかりとかり
是甚依の事後より愚なる事及非雅士事也といふあり雅士とハ
風雅の士といふこかり其後ハ花子つけ交ふこかり合ふこかりハ風雅の士
の爲こかり非ず皆凡依の人の爲所をふん性べきといふこかり

至如燭氣煤烟皆能
殺花速宜屏去謂之
花崇不亦宜哉

至如燭氣煤烟皆能
殺花速宜屏去謂之花崇不亦宜哉

至如燭氣煤烟皆能殺花速宜屏去謂之花崇不亦宜哉
玉如燭氣煤烟皆能殺花速宜屏去謂之花崇不亦宜哉
猶氣とハ燭香子燭燭の灯凡の燈火の氣を以煤烟とハ煤ハす
かこりハけりけり燭ハけり燈の息といふこかり是總の燭氣煤烟
灯の息の如玉てハ皆能花を殺速は花の道をハ屏去ガ宜とかり
都の前より取去所の花子害あるものと皆これを花の崇視といふかり
亦不直哉まよふこかりと云ふ度かり

○本序 本序のこと初巻に書述る
○蘭 古の葉ハ今のふとまこれかり今の葉ハ山茶葉とて右の葉とハ異かり
○含笑 遵生八牋四時花紀曰含笑花産廣東其花如蘭形色
供尚花再不滿若香如蘭然也即凋落余物得自廣東僅寫
二尺許今作拈把刺矣且不懼冬也
○蒼蒲 山抱子の花かり
遵生八牋四時花紀曰抱子花三種有大花
者結山抱甚賤有子葉者有後建綠樹抱子可愛高不盈尺
兩時隨手剪打肥出俱活也

八洗沐
京師風霾時起空牕
淨几之上每一吹掃

八洗沐
京師風霾時起空牕淨几之上

挿ふとす一則日新花の神彩を發し光潤をまし性命を延さしめ
よとかり及は此是を洗沐の法とするあり

夫南威青琴不膏粉
不擗澤不可以為姣

夫南威青琴不膏粉

夫南威青琴不膏粉不擗澤不
可以為姣

不可為姣とハ姣ハよと訓て多きあり容心の美きことより意ハ是れ
南威や青琴等の様を美女までも膏をほけず粉をつけず挿髪も
結す沐浴洗ささす潤澤おくおこれる候まよりさして居るときハ旬其
容止の美麗を失く美女とも挿しごとく為つるはとよこそ花も
其通て何程も花ありとも埃ごけおさけおこれ居てハ名花と花
もほとの之くす因る程日は一度づ洗沐さきて潤澤を失はせぬす
光を添しめお花を垢れ次身よりそ盡ハ美女のとりまて居て又子辱め
られおろすのころもちあるをといひてこり

今按は總而皆花を美人美女子假令て野山の草木を取て室中
挿花とて飛愛淺くす夫南威青琴の如き美女までも膏粉挿
澤せしめ雖もさく候才もせず一々藝を能くし行儀作法もか
かハ美女美人とも為へくす又靴飾のりも凡俗个品より卑きお
りさなるを何とて高位貴人の寵愛と為へんは是即花も因り
こころ野山に生さる草木を其候までこれが生のあるありとて高
位貴人の堂上の席の間へ居らるべきや又雲舟の西越子昂の書かど
の懸幅と相對すべきや攻は能洗浴して淫澤せしめ悉く所のこりき
むのを去嫌てをむけさるをこの直し麗き姿態をささめいさ上品に
して瓶中のおさまりよく一体のすわりよきやさ居すまいの行儀を疑け
雅正名画名筆等の数幅も對する候挿てこそ高貴の人の貴
候とも得べきことあり然と無理なる屈曲をつけ凡俗の身き風俗と
ささめ瓶中のおさまり悉く善作法なる居候の候挿て何
を以ての賞祝とも寵愛とも為べきやこれ挿花といふべしすこれハ
皆技藝の稽古の習候もある候ま尚藝ハ挿花國會は出されは茲に
今以數葉殘芳垢面
今以數葉殘芳垢面穢膚無刺

五月頃の入秋中の雨の勢あり入秋中の雨の勢あり入秋中の雨の勢あり
のぬく潤て字本と背こそ乳汁まで必を果かぬこれと即膏雨とハ
よふりけ意ハ花子喜とき思とき寤とき曉夕の各別有
て流て能き時わひて急き時あり其流て能き時を能て流て能き時
候とよ其時を候得るもあり其時を候得るもあり其時を候得るもあり
これ花の爲ハあふのどく潤あめのぬくもえ精を散一其光と出
やろり入秋中の雨のぬくもえ字本が背長横あそろちのどくも
是と流花者得其候乃為膏雨といふあり

澹雲薄日夕陽佳月
花之曉也狂號連雨
烈燄濃寒花之夕也
唇檀烘日媚體藏風
花之喜也暈酣神斂
烟色迷離花之愁也
歌枝困檻如不勝風

澹雲薄日夕陽佳月花之曉也
狂號連雨烈燄濃寒花之夕也
唇檀烘日媚體藏風花之喜也
暈酣神斂烟色迷離花之愁也
歌枝困檻如不勝風花之夢也

花之夢也嫣然流眄
光華溢目花之醒也

嫣然流眄光華溢目花之醒也

雲の薄と夕陽佳月と薄日夕陽佳月花之曉也とハ澹雲とハ
陽とハ日暉日の入る時をよ佳月ハ皎月夜といふもふり此四の時分
ハ皆花の爲ハ曉ありあつきとハ夜の明方のことあり○狂號連雨烈
燄濃寒花之夕也狂號ハ大風の吹狂號といふ連雨ハ毎日降續く
雨あり連とハ連日といふこと十日毎も降續く雨をさすといふ烈燄といハ
裂く能かぬき曇をよ濃寒ハ濃寒氣といふこと寒氣甚也
よ此四の時分ハ花之爲ハ夕あり夕といハ日の暮方のことあり○唇檀烘
花之喜也とハ唇ハくちびる檀ハ赤き木ありこれハ花の
葩の輝すくといひりといひ等ありて赤きと人の唇子唇て唇檀と
いりあり烘日といハ烘ハくやくと漢字これ其葩の薄くといひりといハ
あてやんちるが日は烘て赤ハあく白ハ赤くはぬといハ麗きといふあり
蔵風とハ婿ハくびあまめくといふ字體ハすくあり蔵ハおさむるあり花の
色艶ありて婿あまめくといハ麗の麗きと徐くといハ風とふくといハ
葩のひりといハ愛らき有横ハぬ何子も花のこの喜あるべし

潤て色艶と増の義あり理ハあるハあるハあるの義あり是前ハ出嬌
 然流野光華溢目花之醒也とありて此趣ハ媚ふまのきて潤くはま
 といへ色艶光澤とま一固ハあるのまゆき極かれハ自然と其膏の如
 潤もまゆくはひくハあるて色艶の潤もあまひく飲て自みき有
 授かり。所以悦ニ其性情一時中其盛居也ハ性ハ花の生質精
 と去憂情ハ花のそろざりあり盛居ハ其盛起するこあり是前
 去ぬく花も時々其曉昏愁喜夢醒の分別ありて其時と候
 得て笑くの香入とて養育すれハ其花の性の情を悦めて其
 悲居を時とする所以あり其花の想通すてきとみいれありと去憂也
 浴曉者上也浴寐者
 次也浴喜者下也若
 夫浴夕浴愁真花刑
 耳又何取焉

浴曉者上也浴寐者次也浴喜者下也ハ浴するどハ洗ことあり
 前ハ出ぬく花の曉こと寐る時と喜時とありて其曉方の時と

浴曉者上也浴寐者次也浴喜者下也若夫浴夕浴愁真花刑耳又何取焉

浴者ハ上也寐る時を浴者ハ次也喜時を浴者ハ下也是前ハ花の
 喜息寤寐曉夕と能を別てす又ハ夜の末ハ浴の法を出して
 花を洗ことと要す前夜の文章と能と見合考へて花の性情を
 察すべき者ありされハ澄雲薄日夕陽佳月花之曉也とありて曉
 時ハ空亭大履置へていり是其時也浴法とていりて
 如何ハ花のそろちち光澤潤居を陪へく尚性命も延くつて
 夫も時ハ此花を看入も挿花の神情あつりて愈々せいくつて
 一入眺も深うんか。寐と浴る若ハ次也と寐ハ夢時あり歎枝園
 猶如不勝風花之夢也と夢時ハ垂簾下幃とあり是ハ前ハ解
 ぬく水と揚る夏ハ揚るがもサ一揚獲ひていりて得と極むとぬ
 風情あり困る能水とありおせ極象の能整まや簾等と懸又ハ
 幃を下して風のおぬ様も多ありて盡く候とあり箇候の時
 洗ハ佳くす然ともわと去憂時也愁時を洗たり願る候もこと
 寐を洗する若ハ次也といり喜を洗する若ハ中也と喜ハ花の
 ちあふ時あり唇檀炷白媚體藏風花之喜也と則先あり其
 喜時ハ灌呼潤笑すとありて愛嬌て居ふとありけ候ある時ハ花を
 洗ハつたり浴ハすは撥て盡ハ増ふれども佳くすことあり故ハ喜を

俗に粉掃雨と云ふものなり解醒とハ醒ハさめる醉とのくと割て酒
の解とさますといふ字ありこれハ譬ハ海に磁那なる風風子あり終
糠雨等ハ濡て涼く覺れハさち能成也ハ磁も解醒て益決る
これを微雨醒を解といふなり○如 清露潤甲と滑露ハ清き露
といふことされハこそ露狂清きものなり夜露降て子其潤澤と灌
冬ハ其露凍氷て霜とあるこれハ天ハ陽ハて風有て乾一地ハ陰
して云氣ありてある夜陰月の水の陰氣とあるて露多しこの
露の清きことまじ少しの濁もさくまほけもさく澄きりて細まりて
いよもさき清きものなり露甘露等とて凡て露ハ甘ありて清
清きこと譬もおもものなり 雨も亦其れ雨又五月頃の入梅の雨
皆陰氣の候まて清清き澄白て甘味ありて和柔これ字本と
書のものともありされハ字本ハ雨露の乳汁子育らけ花咲実と結
去り因而茲ハ微雨醒と解清露甲と潤々如すといふなり甲と潤
といハ甲ハ芽出のころなり芽出と露の潤とを甲と潤といふなり
呉謙徳録花譜曰挿花之水類有小毒頭旦之換之乃可
又若兩三日不換花輒零落綴花每至夜間宜擇益風處露
之可數日此天與入參之術也云々

此吳謙徳々文即前章述る程日一夜花を浴の類あり毎
新水と換て夜ハ風のおぬ所一盪盪と更て天地の業を
濁れハ天と人と參の術ありとあり今如斯時ハ花の水ハ皂角換て
花と書べきことあり善一夜挿て其後換垂二三日と程ハ水も暫く
あり花も換てけ茶ぐけはまり花の為ハ元より急く看入も亦
涼く毛不風雅致風葉より挿花と暖む者ハ能く信べきことあり
○備も花と浴之法といハ根ハ水と掛蓋敷浴といハわび又細敷
洗注水雨のころくまを濡てをり盪こくもわさ前章洗沐と書
又浴と書くる文字は意を注け一洗ハものを洗といふ字沐ハ髪を洗
といふ字あり浴ハ湯とわびることといハ人のゆわこして垢を洗
り備も垢面搽膚刻飾の工ありてをく書くるなり譬ハ今
山茶等の影葉のすくくして艶わるものと磨葉といハこれと挿花
しく二日も盪て視るは葉上ハ埃塵がくまりて其白くある其こく木
も花も埃かごまるなり然も葉ハ艶わる磨葉其埃を視れども
艶よりくる塵ハ視えずかれとも其埃塵をいめられて自然と花の艶
衰極氣も精神も弱りてつらかり是を塵去の質は任ハ枯萎
立ハ玉といふなり攻ハ花ハ経日一夜つて浴ねハありぬあり然れども

急子暴く浴てハ花も葉もいこめて精カも猛も皆勞養るゆへ花の
 刑罰とする様もものす却て花の爲にありぬるなり因而是と浴
 之法と出て清露の如く微雨の如き清泉の甘水の極清浄なる
 と穿鑿して用て細段は水は細くして微雨の如く解さるる如
 清露申芽と潤が如くは自然と洗注して薄く濯ぎすすぐべし
 ○茲に今季亦水と灌る器を器あり先時多かるる
 ちハ水の出る穴大ききく水太く出る故悉く是と花と細段は細く
 微雨の如く水の出るが減りて用べし備又前より花も葉も
 塵出か羅りておれば一過に濡るるなりてハ埃塵が脱ぬなり故
 微雨の降ぬ夜露の垂ぬく自然と久く水と注して洗ハ其塵出
 自然と潤脱て自然と流るるなり如斯氣長水と注してさらりと流
 落仕舞まて手際ととりて洗ぐべしこれハ譬ハ花が塵出若められ
 居るハ人の浴に浴して居る時の如く其好る雨に微雨等濡れて
 さらさらと水が流るる如く解けて洗く覺が如く花も急子暴く敷浴
 次者くは塵出かほは潤流るるなりてさらさらと流るるべし是
 即ち花の清露の垂て甲芽と潤す如く花葉の真の潤色と見
 神精と養い極氣漸くはつと光潤と滋性命と延るるものとあり

○不可以手觸花及指尖折別とハ以手觸花とハ花葉等と
 争ふべしいぢり手暴く花にあり色くと撥奪ごとあり及ハ其上より
 い意指尖ハ指ハゆび尖ハよりするるときと擽て指の尖と去る
 折別ハ折ハ折ハ折ハさくといふ意ありさくと去るなり是と意ハ前
 花や葉に塵や埃が溜りあると急子浴海人といふ手と以ていぢり
 花に指觸て奪り及其上より指の尖の尖を去ると洗て折別と
 すべしすべしすべしすべしすべしすべしすべしすべしすべしすべし
 注掛て塵出の自然とかどひて流去さるるまで水注洗べし如斯する
 時ハ其塵出が退きつて自然と艶と花の柱命も延るるべし總て
 人の手液ハ花の爲に大毒なり葩等一度手を觸き液を觸せば
 花葉も急子暴く慎むべき夏あり○亦不可付之膚如根葉とハ膚ハ
 九膚と熱して常はの者と去ぬハやつこかり是ハ風流も何も知ぬ
 尋常の俗奴下入石仕等の夏あり根葉ハ根葉ハ根葉ハ根葉ハ
 好ハ腰元女給仕女あり根葉ハ根葉ハ根葉ハ根葉ハ根葉ハ
 不可付ハ他に去付べし洗自身及べしとあり右ハ花浴夏や都
 花と取扱夏と凡膚の俗奴や根葉の雜下女等ハ皮を去付べし
 挿花の夏ハ悉皆自然と去べき事ありといふことあり

按子表申郎先生挿花を好嗜す其大方あらず此を愛する
 執心深きゆり花を取扱其を他に去付す自致り致されハ風流
 しくおされども何ぞ凡庸の奴隷雜の婢女等の度と斯事と敷
 一抱て后代は傳へべきやこれハ同好の朋友打寄て挿花を賞玩する
 其同好の朋友は亦えんが為あり今此邦も亦同好を思ふは皆この
 熱の度のことなり是れ去意ハ萬事まつて氣の充満といふことありこの
 氣の満といふことハ萬道皆同一度まで平常朝夕の事まつても氣
 が満されハ剛子立ず譬ハ手習とする者筆の鋒の先までも眼を付
 心意と止て一字一畫一點といふも神精充ほきねハ善書の名を得
 其後一又鐵炮を習者丸筒より出て行て何處所へ中なるを
 去事と見定る程あやハ宜うすと承ぬ必射入飛鳥と射落し或ハ二
 間四方の家まで三間の鎗とつてもこれ皆其隅くまで氣の充満がゆ
 かり技藝の感能ある皆氣の満がゆかり是ハ朝夕坐禪と掃除
 するも帯の先の塵埃何換り飛行て何處て落着くといふ能く
 見屋て扱出すものありハ佳といふも座換りおき者と穢雜者扱
 者ハ花を挿る者尚又けめくも挿花は舞ても掃除もろく
 せず花巻の下綴の内水中杯子塵埃が殘或ハ磁器の傾きたるも

水の不滿あるも構す其意うハ挿る花も拙く骨ざりと思て晒拙き
 もの有り是と凡庸奴の扱者穢雜婢女のそんさい女子譬ておかり
 致し挿花ハ瓶中より稍の細葉多も悉皆蔵て見くさる所まぐも
 あり眼目を止意と用て密なる所疎なる所まぐも葉満と意充
 とハおかり然ハ此花と浴も少の葉先記細葉の先までも葉と止
 意を止て前ハ去塵埃の能流流仕奉りて意寛く水と細眼は注て
 洗洗べ一是と氣の満るとおむのハ挿花と嗜の肝要あるべし

浴梅宜隱士浴海棠宜韻致客浴牡丹芍
 藥宜靚粧妙女浴榴
 宜艷色婢浴木樨宜清慧兒浴
 清慧兒浴蓮宜嬌媚
 妾浴菊宜好古而奇
 者浴臘梅宜清瘦僧
 者浴臘梅宜清瘦僧

浴梅宜隱士浴海棠宜韻致客
 浴牡丹芍藥宜靚粧妙女浴榴
 宜艷色婢浴木樨宜清慧兒浴
 蓮宜嬌媚妾浴菊宜好古而奇
 者浴臘梅宜清瘦僧

此大意ハ花と活子交入の入を譬へて其字本の性質形状と明ら
見しものなり天地自然の造物の作所物として一種あること
更子ありされハ廣野日敗當花のびよりいとかとつゆけき風情深山
櫻の愛しき天地自然の態なるや其字本の性質意態の違ふる
様なり然も姿の能面白揮ると揮花の上手堪徳の技藝といふ
あり然ると粧と揮てハ柄とあり又揚柳と似るよふも皆凡俗の下
技子伊々自然の生質の意態と其小ものかり山茶も様も夜合も
菊も同じ態子揮て本字の分別もかく姿と面白くせんとて
多理子梳出て其本草の本性の意態子遠く是非道りて揮
花とハ去々々紙より若る花も美こま一尚妻ハ揮花同舎子
述ものかり是花と活子も其字本の意態本性と能察し文
の性質子傲て活べきことあり

然寒花性不耐浴當
以輕綃護之標格既稱
神彩自發花之性命可
延寧獨滋其光潤也哉

然寒花性不耐浴當以輕綃護
之標格既稱神彩自發花之性
命可延寧獨滋其光潤也哉

然寒花性不耐浴とハ寒花ハ冬の花寒氣強き時分の事あり性
ハ前子も去通其性稟といふことあり不耐浴とハ活子使いとせずと去
是字中ハ花の性ハ活ハ忽ハ氷る也活子耐々すと一なり○尚
以輕綃護之とハ輕ハかるく薄き意綃ハ薄絹のことあり護之ハ
一とハ去の輕綃の輕き薄絹と覆て護へといふことあり○寒中
の性ハ活ハ活ハ直子氷る也活子耐々すと一なり○尚
これを護くべし綃と覆けて塵出のからぬ様はして字あり
て置ことあり○標格既稱神彩自發花之性命可延とハ標ハ
おとら字格ハかち又のりと刻字標格とハ本意と去事あり神ハ
こま一ハ彩ハ色どりさいきすること神彩ハ花の精其色艶と去事
性命とハ花の命壽命と去事あり○寧獨滋其光潤也哉とハ
寧とハいつそといふ意獨ハそれよりてハかといふ意なり光ハひかり同
ハうる不むといふ字あり光潤とハ其花の色つや光り潤ひと去事あり
○此去意ハ前子も去通其性稟といふことあり○尚妻ハ揮花同舎子
徑白は一皮て活子も去通其性稟といふことあり○尚妻ハ揮花同舎子
寒中の花の性稟ハ活ハ氷る也活子耐々すと一なり○尚妻ハ揮花同舎子
とむつてこれを覆護てとすくべし又揮る熱も若子のこく活入子

啓て其字本の出生の性質意態と悉言おれハ其ものくの空位
の通其元の標格既ハ能稱ハ花の神精意慮も暢くまり色つや
命壽家も延るあるべしとあり

瓶史國字解卷之二終

